

# 全小国研会報

No. 9 6

発行所 全国小学校国語教育研究会  
事務局 立川市王子高倉小学校  
事務局長 田中順子



全国小学校国語教育研究会  
会長 佐伯孝司

## 全国の皆様と共に学び合う全小国研

十一月十六日(木)・十七日(金)、第五十三回全国小学校国語教育研究大会広島大会を開催します。大会主題は、「伝え合う力を高め、言葉の力を育む国語科教育の創造」です。四年ぶりに、公開授業も含めた対面での開催といたします。御参加の皆様が、直接参観したり、話し合ったりすることの価値を改めて感じながら、学びを深め合う機会とすることができれば幸いです。また、後日、講演や発表等の録画を視聴することが出来るオンデマンド参加も可能にしました。広く全国各地からアクセスしていただき、ご自身の関心やスケジュールに合わせて、より効果的に学んでいただければと存じます。全国の皆様に、大会を通じて得られたことを研究や実践に生かしていただき、その成果をまた本会を通じて交流することができるよう、努めてまいります。

大会主題にある「伝え合う力を高め」ることについて、小学校学習指導要領解説国語編では、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めることである。」と示しています。このような内容について、サミットが開催された「国際平和文化都市」広島市で学び合うことができるのは、一層意義深いものであると思います。言葉の力を育む過程で、自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら学ぶ力を身に付けることも、大切です。大会を通じて、全国の皆様と共に、これからの国語教育の充実と発展のために伝え合い、主体的に学び合うことができることを期待しております。そのことが、全国の小学校における児童の資質・能力の向上、さらにはウェルビーイング (Well-being) の実現につながると考えております。

今回も、文部科学省初等中等教育局教科調査官 大塚健太郎様には、「学習指導要領の趣旨の実現に向けて」言葉による見方・考え方を働かせる国語科の

授業づくり」を演題に御講演をいただきます。また、広島市立白島小学校では、慶應義塾大学教授 今井むつみ様から、「本物の言葉力を育む教育」を演題に、広島市立本川小学校では、作家 朽木祥様から、「物語ること、伝えること」他者の苦痛へのまなざしを育てるために」を演題に、御講演をいただきます。さらに、広島大学大学院教授 間瀬茂夫様、難波博孝様には、各小学校会場で指導講話をいただきます。皆様にとって実り多い大会となることを願っております。七月三十一日(月)には、夏季実践交流セミナーを渋谷区立上原小学校において開催しました。ここでも、文部科学省 大塚健太郎様には、「学習指導要領の趣旨を実現する小学校国語科の授業づくり」を演題に御講演をいただきました。参加者は、学習指導要領の目指すこと、目標や授業改善の視点について理解を深めました。さらに、単元構想や学習評価等を含めて授業づくりについて具体的に丁寧な御指導をいただきました。

江東区立砂町小学校副校長 高橋誠人先生による模擬授業では、読書座談会という設定での参加者の意見交流が、たいへん好評でした。児童が主体的に学ぶ姿を思い浮かべながら、協働的に学びを深め、自覚していくことの価値を共有することができたと思います。

分科会では、深田知子先生(京都市立御所南小学校)、大野貴子先生(名古屋市立大宝小学校)、清水達郎先生(東京都清瀬市立清瀬第六小学校)、足立朋美先生(東京都狛江市立和泉小学校)に授業実践について発表していただきました。発表を受けての協議会では、活発な意見交流の様子が見られました。参加者からは、実践発表が素晴らしく多くのことを学んだなどの称賛の声とともに、全国の様々な地域の方から意見を伺うことができたのが勉強になったという声も、たくさんいただきました。

全国小学校国語教育研究会は、全国の小学校国語教育関係者の力を結集し、我が国の小学校国語教育の推進と発展に寄与することを目的として活動しています。七月一日(土)には、令和五年度第一回理事会を日本出版クラブにおいて開催しました。夏季実践交流セミナーと本会理事会の概要については、この後のページに掲載していますので、ぜひ御覧ください。

結びになりますが、広島大会開催にあたっては、本会顧問 岩本和貴様、広島大会実行委員長 岩本ゆか様はじめ大会実行委員の皆様、会場校の広島市立白島小学校、本川小学校の皆様にたいへんお世話になりました。ありがとうございました。大会に御協力くださいましたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

(東京都渋谷区立上原小学校長)

## 夏季実践交流セミナー特別講演

演題 「学習指導要領の趣旨を実現する小学校国語科の授業づくり」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

大塚 健太郎 先生

## 一 学習指導要領で目指すこと

今次学習指導要領において、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理された資質・能力を、バランスよく育む必要がある。「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」を自転車の両輪とするならば、「学びに向かう力、人間性等」は、行き先を決めるハンドルとイメージすると、三つの柱の関係性が理解しやすくなるのではないだろうか。

子供たちが未知の状況に相対した際に、今もっている「知識及び技能」を活用し、思考、判断、表現等を行いながら問題解決を図っていく。その過程で試行錯誤を繰り返しながら、また、新たな「知識及び技能」を習得していく。さらに、学んだことを社会に生かそうとすることで、学びに向かう力、人間性等が育まれていく。国語科以外の他教科等での取組も視野に入れ、普段から子供の生活を、この資質・能力の三つの柱から確認できるような工夫を教室に取り入れておくことが大切である。

## 二 「資質・能力の育成のための授業改善」の視点

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにする。

子供が、興味・関心をもち学習をすすめていくと、子供同士、子供と教員等が、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする対話が展開される。この対話を通して、自分の思いや考えをさらに広げることができ、習得・活用・探究という学びの過程の中で、国語科の場合であれば、言葉による見方・考え方を働かせながら、深い学びの実現に向かっていく。このサイクルを継続することで、さらに資質・能力の育成ができる。

## 三 国語科の目標の確認

国語科は、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国

語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する教科である。言語活動は、資質・能力を育成するための手段である。言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり、問い直したりして、言葉の自覚を高めることである。つまり、子供は、日常生活において言葉を使って生活をしているが、言葉に自覚的になることで、「どのように表現すればよいのか。」など、適切な使い方を習得していく。国語科の学習を進めるにあたって、言語活動を行うことが目的になっではないか、子供の実態に合わせた教材になっているか、言語活動から単元を考えてはいないかなどを確認する必要がある。目指すべきものは、資質・能力の育成であることに留意いただきたい。

## 四 学習評価の改善の基本的な方向性

学習評価の位置づけを考え、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図ることである。

- ① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ・ 児童生徒自身が学習の状況を評価していくことが大切である。
- ② 教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ・ 子供の実態を把握して、常に適切な改善を加えることが大切である。
- ③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと
- ・ 育成すべき指導事項を適切に評価できる評価方法や場面となっていくかなど、再度確認する必要がある。

目指すべきは、資質・能力の育成のための評価にすることである。

## 五 学習指導要領の趣旨を実現するための授業改善に向けて

「このような授業を出合っていますか」

- ・ 子供たちの意見や生活からかけ離れた学習課題

↓主体的に取り組みたくなる課題に設定されているか。ただし、学習内容によつては、その限りではない。

- ・ ワークシートの計画が細かく示されていること

↓過剰な手だてや手助けは、子供の学習意欲をそいだし試行錯誤の機会を奪ったりする。ただし、学習の見通しをはっきりさせることで、子供が安心して学習できる場合などは、この限りではない。また、必要とする力を身に付けるために、子供が考えて選択する機会があるかなど、ワークシートの活用の是非を含

めて、検討する必要がある。

・ 毎時間形式だけの振り返り

↓明確に目的をもって行わせているか。ただし、学習環境(習慣)を整える目的において必要な場合もある。

・ 一人↓ペア↓グループ↓クラス全体(子供たちの思考と関係なくいつもこのパターンでの学習展開)

・ 「お隣さんと会話して確認しましょう。」の対話

↓ただし、これらは先程同様、学習環境(習慣)を整える目的において必要な場合もある。

↓子供の学習計画において、必要なタイミングで適切な相手との対話等となっているか。また、自分の考えをまとめるための思考の時間は十分取られているか。

・ 発達の段階や学習指導要領に合わない難しい学習、複雑な学習、高度な学習になっていないか。

↓研究授業、公開授業等、教師の都合で学習内容等が決定されていないか。

螺旋的・反復的な年間指導計画や発達の段階に合わせた学習、学習活動の特徴を意識した学習展開も大切である。

資質・能力を育成するには、授業を行おうとしている目の前の子供たちの実態を踏まえ、どのような学習活動で単元を展開することが適切か、過去の成功体験に捕らわれることなく、常に工夫や改善をしようとする教師側の構えが必要である。

六 国語科授業づくりの五つのステップ

ステップ1 単元で取り上げる指導事項の確認

ステップ2 単元の目標と言語活動の設定

ステップ3 単元の評価基準の設定

ステップ4 単元の指導と評価の計画の決定

ステップ5 評価の実際と手立ての想定

指導と評価の一体化(事例 『「指導と評価の一体化」のための

学習評価に関する参考資料【小学校 国語】』

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について

「世代による言葉の違いについて意見文を書こう」(六年生)

1 単元で取り上げる指導事項を確認し、単元の目標と言語設定、評

価規準を設定する。主体的に学習に取り組む態度の評価規準は、

「粘り強く、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫し、学習の見通しをもって意見文を書こうとしている。」としている。

①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、  
②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の双方を適切に評価するため、特に、粘り強さを発揮してほしい内容と、自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動を考えて授業を構想し、評価規準を設定することが大切である。

2 学習活動導入時では、主体的に取り組むようになる課題を設定する。評価規準・評価方法等においては、「おおむね満足できる」状況(B)の想定を行い、適切な時間に評価の場面を設定する。

3 学習課題展開時には、試行錯誤する場面の確保を行う。例えば、自分の書き表し方の工夫について振り返るとともに、友達や教師と交流した際に得た指摘や助言を踏まえて、書き表し方をさらによいものにしようと粘り強く試行錯誤する様子が見られた児童は、「主体的に学習に取り組む態度」の「おおむね満足できる」状況(B)と想定した。

4 作成した「指導と評価の計画」を基に授業を行う。児童の書いた下書きから書き表し方について、友達から指摘を受け、その指摘を受け修正する。教師は、意見文が完成するまでの試行錯誤する様子を見取ったり、単元の目標の達成に向けた助言したりする。学習をすすめるにあたり、指導事項が育成された子供の姿を具体的に想像できているかが重要である。

八 「令和の日本型学校教育」とGIGAスクール構想

知識伝達や正解主義が中心であった教育から、資質・能力の育成を目指す教育へと時代の変化に応じていくことが求められる。

子供の学習者としての視点を大切に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」のそれぞれの学びを一体的に充実させていくとともに、これまでの価値ある教育実践の蓄積とICT機器の効果的な活用を掛け合わせることで、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善につながる学習活動の一層の充実が期待される。

【文責】 市川こずえ

## 夏季実践交流セミナー・模擬授業の報告

授業者 江東区立砂町小学校 高橋 誠人 先生

単元名 つなげて重ねて読み解く 立松和平の表現する「命」

読書座談会で「命に対する疑問」を解き明かそう

― 個別最適な学びと協働的な学びの一体化に向けて ―

教材名 教科書教材 「海の命」立松和平（光村教育図書 6年 創造）

関連図書 「山の命」立松和平 など「命」シリーズ

## 四 模擬授業の実際

(一) 一人読みで話題を考える。

「海の命」を読み、付箋に話題を書く。付箋には、行番号を書き、叙を基に話題を考える。

(二) ミニ座談会で話題を選択する。

グループに分かれ、付箋の内容毎に分類しながら、話題の順番を決める。その後、「ミニ座談会」を行い、話題について話し合う。話し合いは、座談会をしたり、聞いたりできるようにグループごとに交流する。

(三) 一人読みで再度、話題について考える。

本文に立ち返り、話し合った話題から一、二つを選択し、全文シートから根拠を見付け、サイドラインを引きながらまとめる。

(四) 座談会

グループで話題を絞り、司会は立てずに、自由に考えを伝え合う。

## 一 実践の趣旨

「命」をテーマに関連する作品を複数読み、読書座談会を通して命に対する疑問を解き明かす

## 二 実践のねらい

「海の命」や「山の命」等を読み、「命」に関わる様々な表現が読み手に与える効果について自分の考えを明らかにし、暗示性の高い表現や作品から伝わるメッセージ、「命」を強く着目して読んでいく。

読書座談会の目的自体が、意見を交流し考えを広げることにあるので、その目的を達成させるような読書座談会を成立させていくための力を付けさせたい。

## 五 指導・助言

全国小学校国語研究所 飯田 薫 先生

○ 話題を見付けることは、「問い」を見付けることである。しかし、子供たちが問いを見付けることは難しい。「海の命」は、「太一」を主語にしている文章が一八文ある。問いを見付けるときに、「なぜ、太一は」という視点を発問するだけでも子供たちは、問いを見付けやすくなる。

○ 「自分の解釈は絶対ではない」ということが、「読書座談会」で気付くことができる。グループで同じ考えを見付けたり、分類したり、解決したい問いをとことん追求できることで、言語活動のハードルが低くなり、どの児童も話したいと思えるようになる。

○ 「海の命」は、「命」に関係する問いが大きなテーマとなる。しかし、「命」だけでなく、「生き方」や「人生」に焦点を変えるだけで、問いの「色」が異なってくる。どこに焦点を当てて、「読書座談会」をしていくのかを考えていくことが大切である。子供たちが、物語を俯瞰的に捉え、考え、交流できるような「問い」のデザインをし、様々な考えを通して納得できる答えを見付けていけるようにしていくことが重要である。

## 三 授業づくりのポイント

◇ 個別最適な学びと協働的な学び

個別最適な学びが、学習者視点から整理された概念であることから、「命」をテーマにした教材を複数扱い、子供たちが座談会で自分の考えを述べる際に、その根拠となる言葉や文章を選択できるようにした。また、学習課題や座談会の話題も一人一人文章を読んで「命」というテーマを基に、自分で解決したいことを取り上げられるようにしている。一人一人が自ら課題をもち、その課題について必ず全員で話し合う機会を設けることで個別最適な学びと協働的な学びが実現すると考えた。

夏季実践交流セミナー授業実践発表と協議会

○第一分科会

「言語活動を通して、思いや考えを深め、表現する子ども」

音読の指導に関わってー「たぬきの糸車」を中心にー

授業実践発表者 京都市立御所南小学校 深田 知子 先生

一 主な発表内容

○言語活動を通して、子供たちが必要感をもって学習できることを目指してきた。声を出して読むことで理解を深めていくということを実感した。

○教材の特性をとらえて読むということを指導してきた。

「大きなかぶ」⇨順番に気をつける。役割読み。劇化。

「おむすびころりん」⇨リズムの良さに気づく。リレー読み。

「やくそく」⇨話している人、様子を考える。マイ吹き出し、ペア読み、オリジナル絵本作り。

「くじらぐも」⇨想像を広げてお話の中に入る。行間の言葉を考える。同じ言葉だが、同じ読み方でいいか考える。動作化。

○「たぬきの糸車」⇨描かれていない部分も大事にしながら音読する。吹き出しカードの活用。一番好きな場面を紙芝居にして紹介する。

二 主な質疑応答

Q マイ吹き出しについて詳しく教えてほしい。

A 挿し絵のところ登場人物の言葉を想像して書いていく。

Q 単元のゴールは、いつ子どもに知らせ、イメージさせるのか。

A 導入でイメージさせ、一人一人の子供が意欲を高める工夫をしている。

三 指導助言

○「個別最適な学び、協同的な学び」というのは、ひとりひとりの子どもを大切にすることの重要性を言っている。今回の授業は、細やかな授業の積み重ねでできたものである。一斉授業の中で埋もれる子どもを出さないために個別、協同的な学びを具体的に考えていく。

○この作品を読んでどんな子どもを育てたいか、そのためにどんな課題をつくるか、この二つの目的を持続して意識していけるゴールと課題をつくるのが重要である。

○音読で大事にしてほしいことは、どの言葉を大事にするのか、教材研究を視点をもつてすること、声に出して読み、指導計画を作ること。

○良い声を出させるためには、普段からトレーニングの時間をとること、声を出すのが楽しいという子どもを育てていってほしい。

○研究は色々な人と学び合い、成果を積み上げることが大事。○第一分科会

全国小学校国語研究所 福本 菊江 先生

○第二分科会

「主体的な学びを生み出すための書くことの指導」

自由進度学習による学びを選択する力を育む授業づくり

授業実践発表者 名古屋市立大宝小学校 大野 貴子 先生

一 主な発表内容

○誰かに与えられるのではなく、自分で考え、必要なことを選択する力を身に付けさせるために、自由進度学習を国語科に取り入れた。

○「リーフレットで知らせよう(教育出版上)」では、社会科で学習した内容を知らせるリーフレットを書くという課題を設定した。その後、自由進度学習を進めるための「スタートアッププロジェクト(一斉授業)」を行い、リーフレットを書く際に気を付けることや意識することについて指導した。自由進度学習を進める際には、書く過程の「題材の設定・内容の検討」「構成の検討」「考えの形成、記述」「推敲」にどの程度の時間を費やすかを児童自身に決めさせた。さらに、学級内の誰がどの過程に取り組んでいるかを全体に提示し、教え合ったり、相談したりできるようにした。

二 主な質疑応答

Q 国語科における自由進度学習において、先生がどのような配慮をしてきたのか。

A 毎時間の振り返りを大切に。一人一人の振り返りを一覧にし、児童のつまづきを把握した上で、次時に適切な声を掛けてきた。また、児童同士の関わりがスムーズにいくような声掛けをした。

Q 自由進度学習中の「アドバイスタイム」はどのように取り組んだのか。

A 教室の真ん中に、アドバイスをもらいたい人が集まり、互いに教え合う。教師が、「この人に聞きたいよ。」などの声掛けをし、互いのアドバイスが意味のないものにならないよう配慮した。また、教師にアドバイスをもらいたい児童のために、座席の位置も配慮した。

三 指導・助言

○他教科との関連を図った単元作りはともよい。ただし、目的意識が弱い。「何のために」という視点が入るとさらによい実践となる。

○本単元では、書くことの学習過程を児童に理解させていかなければならない。自由進度学習における「学び方を学んでいく」ことに加えて、指導事項もきちんと指導しなければならない。単元や児童の実態に合わせて、自由進度学習と一斉指導を選択していくことも大切なのではないか。

全国小学校国語教育研究会 顧問 鈴木 美紀 先生

## ○第三分科会

小学校段階におけるプレゼンテーション指導の追究

聞き手分析を取り入れた学習指導の工夫

授業実践発表者 東京都清瀬市立清瀬第六小学校 清水 達郎 先生

## 一 主な発表内容

○プレゼンテーション能力に関する課題達成型ルーブリックを「資料を用意する力」と「資料を使って話す力」に整理して学習者に提示することにより、学習者自身が自己の課題に応じて取り組むことができた。

○聞き手分析の具体的視点を三項目に焦点化して示した。そのため、発表の際に、聞き手の知識量の差を意識して説明を加えたり、実際に体を動かしたりしており、聞き手と対話しながら情報を補うことができた。

○単元学習の導入部においてモデリングを行い、学習者にプレゼンテーションの具体的なイメージをもたせることができた。また、ルーブリックに取り組み際に、教師のプレゼンテーションモデルに加え、視点および使用する視覚資料を合わせて提示し、学習者の理解を促すことに効果的であった。

## 二 主な質疑応答

Q ルーブリックの活用場面を教えてください。

A 活用場面としては、①単元の最初と最後に見せた、②形成的評価として、一単位時間の始めと終わりに見せた。いずれも情報量の精選の難しさがあつた。

Q 教師の役割を教えてください。

A モデルを示すこと。モデルだけでは認知が難しい学習者もいる。また、メタ認知が難しい学習者もいる。資料作成、発表準備などの過程の振り返りで価値付けをする。大枠を提案することである。

## 三 指導・助言

全国小学校国語研究所 阿部 澄子 先生

○プレゼンテーション(資料を活用して自分の思いを伝える)とは「何を伝えたいか」ではなく、「何が伝わったか」が肝要である。

○プレゼンテーション学習では、「伝えたいこと」が情報の視覚化により、相手に伝わりやすくなり、双方向のコミュニケーション力を高めることができる。

○プレゼンテーション学習の「課題(本)」「発表方法(視覚資料)」を学習者が選択したことにより、学習者が主体的に取り組むことができていた。

## ○第四分科会

自己実現を目指し、「求めて聞く子」を育成する指導と評価の工夫

きいて、きいてすてきな三年生へむけて レベルアップ大きくせん

授業実践発表者 東京都狛江市市立和泉小学校 足立 朋美 先生

## 一 主な発表内容

○「聞きたい・知りたい・教えてもらいたい」と思いを抱く話題の設定。

○「話すこと・聞くこと」のモデルを示す工夫

モデルから学ぶ指導する観点は、態度面だけでなく、技能面についても高めていく。具体的なモデルを見せることで、どの児童も活動の見通しが持てるようになり、効果が高い。一方で、モデルに縛られるという懸念があったため、未完成なモデルを提示した。このことにより、未完成の動画の先を、自分だったらどう続けるかを児童に問い、考えさせる動画とした。

○評価につながるワークシートの工夫

揭示物(りんごの木)を手だてとした学習活動とした。発表会を通じて、気付いた点は、メモとして「赤いりんご」のカードにまとめるようにさせ、メモをする目的意識を重視した。また、欄を感想と自己評価に分け、どちらも書かせることで、実践授業では、感想と聞く力の二つを振り返れてよかった。

## 二 主な質疑応答

Q 相手に共感しながら聞くはできるが、質問して話題を広げることが難しい。効果的な言葉かけを教えてください。

A 全体へ広げた児童、「質問は思いつかないから、感想を言うね」「質問と感想のドッキング。私はそれを思いつかなかったけど、どうしてあなたはそれを思いついたの。」です。

Q 「話す・聞く」の自己評価で、子供が適切に振り返って評価することに難しさを感じている。どのようにするよいか。

A 授業時間を考慮すれば、◎、○、△などの記号もよい。但し、子供自身の評価イメージに左右されてしまう。記述式は、具体的な自分の姿や言葉に着目して振り返られる良さがある。

## 三 指導・助言

全国小学校国語研究所 講師 依田 雅枝 先生

○特に低学年では、「聞いて、聞いて！」と話したが、り屋の子が多く、「聞く」ことが苦手な児童が多い。子供たちの「聞くこと」の力を高めるために「集団生活では『一度で聞くこと』『必要感』のある話題・日常生活場面等での指導・子供に関わる全ての大人が、日本語を美しく使える人」ということを大切にして実践を積み重ねていただきたい。



【第五十四回 全小国研 山口大会の案内】

◆大会主題 小・中・高を貫く言葉の学び

↳国語科における「深い学び」とは何か

◆期 日 令和六年十一月二十八日(木)・二十九日(金)

◆会場 一日目・二日目 KDDI 維新ホール

◆主な予定

・十一月二十八日(木)

全体会 開会行事 基調提案

講演 文科省教科調査官 大塚健太郎氏(講演依頼中)

記念講演 作家 重松清氏(講演依頼中)

全小国研理事会・総会・レセプション

・十一月二十九日(金)

研究発表・協議会(午前) 七分科会

公開授業・協議会(午後) 三分科会

◆大会主題設定の問題意識

(ア) 今回の学習指導要領は、子どもの国語科の資質・能力を育成するために、小中高をとおして、「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点が提示された。これは、特筆すべき点である。

(イ) 授業改善の視点の「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」のうち、「深い学び」の視点が抜け落ちた国語科授業が散見される。

(ウ) 子どもの側に立てば、言葉の学びは、小中高でつながっている。そこで、山口県の小中高の連携は、「深い学び」というキーワードで貫きたい。

◆「深い学び」の捉え方

児童・生徒が言葉に着目し、「対象」と「言葉」、「言葉」と「言葉」の関係をつかえたり、問い直したりすることで、言葉の働きに対する認識が深化・変容していくことである。

◆深い学びの実現に向けた「仮設」

①児童生徒の興味関心と教材の構造を踏まえ、表現者の意図を意識させながら、②表現上の工夫について考えたくなる学習課題を設定すれば、児童生徒は、自身の言葉による見方・考え方を働かせ、③その言語活動の過程で言葉の働きに対する認識の深化・変容が起こり、「深い学び」の実現が期待できる。

◆大会実行委員長 問恵 満貴(山口県山陽小野田市立須恵小学校長)

【全国小学校国語研究所情報】

【目的】

研究所は、全国小学校国語教育研究会の目的並びに事業を補充する付属機関として機能し、全国小学校国語教育研究会の教育理念と研究構想に基づき、国語教育の創造を通して、わが国の国語教育の充実・発展に寄与することを目的とする。

【第十五次 研究内容】

〈研究主題〉

「生きて働く読解力」の育成を目指す指導法の研究

→目的をもって、情報を関連付けて読み、「考えをまとめる力」を育てる授業づくり

〈授業づくりの三つの重点〉

① 読む目的をもつこと ② 情報を関連付けて読むこと

③ 読んで理解したことを基に、考えをまとめること

【第十五回 研究発表会 報告】

日時 令和五年十月二十八日(土) 午後一時 開会

午後四時半 閉会

会場 東京都中野区立教育センター(みらいステップなかの)

内容 ○ 研究発表

○ 参加者が交流する授業提案

低学年分科会 第二学年『どうぶつ園のじゅうい』

高学年分科会 第五学年『固有種が教えてくれること』

○ 記念講演・講師

『小学校国語科 学習指導要領の趣旨の実現に向けた授業づくり』『読むこと』領域を中心に

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

大塚 健太郎 先生

○ 低・高の分科会に分かれて分科会ごとに学習指導案を基に「授業づくりの三つの重点」について提案。これを受けて、参加者一人一人が自分の実践事例や研究会等で得た事例から良いと思う具体的な手だてについて考えを交流した。

様々な実践事例の交流を通して、「国語科で目指している資質・能力を身に付けさせるための手だての工夫による授業づくり」について共有するとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について話し合った。